

単竜・単鳳環頭大刀の編年

新納泉

【要約】 裝飾付大刀は、古墳時代後期に各地の豪族が権威の象徴として身につけていたと思われる、特別な意味をもつ遺物であり、本稿でとりあげる単竜・単鳳環頭大刀も、そのような裝飾付大刀の一種である。本稿は、単竜・単鳳環頭大刀の環内に見られる竜や鳳凰の文様と、環に施された竜文などの型式学的分析を通じ、その年代を明らかにしようとするものである。日本出土の単竜・単鳳環頭大刀は、百濟武寧王陵出土単竜環頭大刀の系譜につながり、しだいにその文様が崩れてゆく過程をたどることができる。そこで、武寧王陵の年代と、日本出土資料に伴出する須恵器の編年を考えあわせるならば、単竜・単鳳環頭大刀の盛行期は六世紀中葉から末と推定される。これを双竜環頭大刀や頭椎大刀など、他の種類の裝飾付大刀の編年と結びつけるならば、本稿の考察は古墳時代後期の地方豪族の動向と兵制の実態を考える上で有効な一つの材料となるであろう。 史林 六五巻四号 一九八二年七月

一 はじめに

我国では、古墳時代後期に築造された古墳から、時として金銀に輝く裝飾をもつ大刀が出土し、人々を驚かせている。このような裝飾付大刀のなかで、柄頭が環状をなし、その中に一匹の竜あるいは鳳凰の頭部を側面から表現した裝飾をもつものが、本稿でとりあげる単竜・単鳳環頭大刀である。双竜・双鳳環頭大刀や頭椎大刀とともに、古墳時代後期の裝飾付大刀を代表するものと言えよう。

しかし、単竜・単鳳環頭大刀の分布は我国に限られるわけではない。朝鮮半島でも数例が出土しており、むしろ日本出

土のものより精巧であって、年代もややさかのぼる例が多い。また、この中には我国の資料と型的連続性をもつとともに、絶対年代を知ることのできるものが含まれている。各種装飾付大刀のうち単竜・単鳳環頭大刀を本稿でとりあげる理由は、日本の装飾付大刀に年代的基準を与えることができる最も適当な資料であると考えられるからである。したがって、本稿では日本出土の資料を中心として、それに関連する朝鮮半島出土資料を加えて検討を進めることにしたい。^①

ところで、これら装飾付大刀を出土する古墳は、墳丘、石室、副葬品などの点ですぐれたものが多い。墳丘に関しては、前方後円墳や、円墳であっても比較的規模が大きいなどの特徴を指摘することができる。横穴式石室の場合、床面積や石材の大きさが、他の古墳とくらべてきわだっていることが多い。副葬品も馬具などの金銅製品を多量に含んでいる例がしばしば認められる。このような特色をもつ古墳は、各地域における首長墓とみなしうる場合が多いであろう。

一方、文献史学の分野では、埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘文の発見によって、「杖刀人首」という刀と関係のある地位の存在が知られるとともに、熊本県江田船山古墳出土大刀銘文の解釈にも再検討が加えられ、大刀のもつ歴史の意味が改めて注目されるようになった。日本書紀天智三年二月条には「其の大氏の氏上には大刀を賜ふ。小氏の氏上には小刀を賜ふ。其の伴造等の氏上には干楯・弓矢を賜ふ」という記事も見られる。これらの史料によって畿内政権から各地の有力首長層に大刀が分与されたと考える説が有力になってきている。さらに、ワケというカバネを大刀の分与（ワケ）と結びつける見解もあらわれている。^④

このように、文献から見ても装飾付大刀のもつ歴史的役割は決して小さくないようである。装飾付大刀の編年と分布の考察は各地の首長層の動向を知る上で重要な資料となるものと思われる。

ところで、このような資料を用いて首長層の動向を論じるためには、それにふさわしい厳密な年代決定がおこなわれなければならない。本稿の目的は、こうした研究の前提として、代表的な装飾付大刀のひとつである単竜・単鳳環頭大刀を用いて年代決定の方法を示すことにある。また、装飾付大刀の編年は、さらに後期古墳の編年そのものに対しても、少な

からぬ意味をもつてであろう。

まずはじめに、装飾付大刀の年代に関する研究史をふりかえりつつ、研究の現状についていくつかの問題点を指摘しておきたい。

浜田耕作・梅原末治は、滋賀県高島郡高島町鴨稻荷山古墳の調査報告書の中で、装飾付大刀に関する最初の本格的な研究をおこなっている^⑤。そこで示された環頭大刀柄頭の集成図は、柄頭の型式の変遷を考慮した配列がなされており、注目される。続いて後藤守一や神林淳雄が柄頭の型式学的研究を進めた^⑥。戦前における装飾付大刀の編年研究は、柄頭の型式にもとづくものであった。

それに対し、戦後新しい視点から研究を進めたのが向坂鋼二である。向坂は静岡県掛川市宇洞ヶ谷横穴の発掘調査報告書の中で、静岡県内の装飾付大刀を集成し、あわせて装飾付大刀の編年を試みている^⑦。装飾付大刀の編年は、従来柄頭のみ目を向ける傾向があったのに対し、向坂は柄頭以外の装具に着目し、装具をa、b、cの七類型に分類した。たとえば、c類は「銅板を金薄板で包む金具（金金貝）」と、銀線（刻みを斜交互に入れる）で柄部を巻き、鞘には金金貝の責金具でしめるもの^⑧である。そうして、各類型の大刀にともなう須恵器の年代を検討し、第一表に示すような編年を提出した。向坂の研究は、装具全体に注目し、それによって各種大刀相互の年代的平行関係を示すとともに、伴出須恵器の年代を明らかにした点に大きな意義を認めることができる。その後発表された町田章の研究も、この時期の装飾付大刀の編年に関しては向坂のものと同じく大きいと考えてよいであろう^⑨。

このように、向坂の論考は装飾付大刀の研究を新しい段階に進めたものであるが、その性格を一言で表現するならば、須恵器の年代に依存する編年とすることができようであろう。つまり、向坂は戦前の研究の成果である柄頭の型式学的変遷よりも、その他の装具の変化に重点を置いているが、装具には柄頭の文様に見られるような退化という方向性のある変化がほとんど認められない。したがって、たとえばc類とd類のいずれが古いかを決定する根拠は柄頭以外の装具自身にはな

第1表 裝飾付大刀の編年（向坂綱二）

			5C	6 C			7 C			8C
			後	前	中	後	前	中	後	前
A 環 頭 式	1	三葉環式	(県内に例なし)							
	2	三葉環式	(b)							
	3	獅嘴式	(b)	(e)						(e)
	4	單竜式	(c・d)	(d)	(e)					
		Iβ種		(d)	(e)					
5	双竜式	Iα種	(c)	-? -		(e)	(f)			
		II種				(e)	(f)			
		III種					(f)			
B	円頭式	(d)	-? -		(e)	(f)				
C	圭頭式				(e)	(f)				
D	方頭式					(e)				
E	頭椎式				(e)	(g)				

* 点線内は朝鮮製を示す。

く、伴出須恵器の編年によらねばならないのである。須恵器に関して今日各地でかなり細かい編年が提出されているが、なお地域ごとの平行関係が明確でないうえに、研究者間の意見の違いも認められる。さらに、大刀の製作年代と伴出須恵器の年代に開きがある可能性を考慮すれば、事態は一層複雑にならざるをえない。やはり、可能な限り大刀自体による編年を追求する必要があるのである。

これに対し、穴沢味光・馬目順一は、向坂とは異なった方法を用いて朝鮮半島出土の竜鳳文環頭大刀の集成と編年をおこなっている^⑨。これは、竜鳳文の退化に着目して五世紀後葉から六世紀後葉にかけての約一〇〇年を八型式に分けるといふ細かい議論である。しかし、日本出土の資料については、あまり詳しく論じられておらず、本稿で問題にする単竜・単鳳環頭大刀の編年に関しては、その概略が示されているにすぎない。また、新谷武夫の編年^⑩は、型式学的な操作に多少の問題が認められ、細かい点に関してはさらに検討を要する部分がある。

このように、裝飾付大刀に関する近年の研究は、編年の細分が進められているにもかかわらず、型式学の適用方法など

に問題があり、須恵器などにくらべ編年の信頼性が低いという評価は、残念ながら否定できない。このような現状では大刀を用いて先に記したような歴史的問題を論じることが困難であろう。

そこで、以上に述べたような問題を考慮に入れ、本稿ではより厳密な方法を用いて単竜・単鳳環頭大刀の編年をおこなうことにしたい。その方法とは次のようなものである。

まず、資料の先後関係である相対年代の決定のために型式学的研究方法を用いる。裝飾付大刀は多くの装具が組み合わさっており、それだけ分析の要素も多いのであるが、そのなかで型式の連続的な変遷をたどることのできる要素に着目し、一連の型式的連鎖を組み立てる。これはO・モンテリウウスが型式系列（組列）と呼んだものである。①そして、この型式系列の中に見られる退化の要素を検討する。退化に着目すると、型式系列の方向性を定めることができるだけでなく、その型式系列が正しいかどうかを検証することもできるのである。このようにして、大刀自体の分析によって、須恵器など他の助けを借りずに型式の変遷を明らかにすることにした。

次にこのようにして組み立てられた単竜・単鳳環頭大刀の系列が何世紀のいつごろにあたるかという絶対年代の決定をおこなう。絶対年代を直接推定できる資料は朝鮮半島の一例しかない。それは、文献等によって細かい年代が知られている百済武寧王の副葬品である単竜環頭大刀である。しかし、一例ではひとつの系列のなかの一点がおさえられるにすぎない。そこで、これ以外は須恵器の年代に依存せざるをえない。須恵器に関しては、すでにおおよその絶対年代が知られている。したがって、このような手続を経て単竜・単鳳環頭大刀の絶対年代を間接的に推定することができるのである。

① 我国では単竜環頭大刀と単鳳環頭大刀がそれぞれ数十例知られているが、本稿では可能な限り実見しえた資料を中心に検討を加えるつもりである。

② 埼玉県教育委員会編『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』（一九七九年）。

③ 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋『日本書紀』下（『日本古典文学大系』六八、一九六五年）。

④ 川口勝康『瑞刃刀と大王号の成立』（『古代史論叢』上巻、一九七八年）。

⑤ 浜田耕作・梅原末治『近江国高島郡水尾村鴨の古墳』（『京都帝國大

学文学部考古学研究報告』第八冊、一九二三年)。

⑥ 後藤守一「原史時代の武器と武裝」(『考古学講座』第一巻・第六

巻、一九二八年)、同「頭椎大刀について」(『考古学雑誌』第二六巻

第八号・第一二号、一九三六年)。神林淳雄「金銅裝大刀と金銅製柄頭

——特に原史時代金銅製柄頭群の形式分類について——」(『考古学雜

誌』第二九巻第四号、一九三九年)、同「環頭柄頭雜攷——環頭大刀

とその文化——」(『考古学雜誌』第三三巻第二二号、一九四三年)。

⑦ 向坂綱二「飾大刀について」(『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳發掘調査報

告』静岡県文化財調査報告書第一〇集、一九七一年)。

⑧ 町田章「環刀の系譜」(『研究論集』Ⅲ、奈良国立文化財研究所学报

第二八冊、一九七六年)。

⑨ 穴沢味光・馬目順一「龍鳳文環頭大刀試論——韓国出土例を中心と

して——」(『百済研究』第七輯、一九七六年)。

⑩ 新谷武夫「環状柄頭研究序説」(『考古論集——慶祝松崎寿和先生六

十三歳記念論文集——、一九七七年)。

⑪ O・モンテリウス(浜田耕作訳)『考古学研究法』(一九三二年)。

なお、H・J・ニガース(田中琢、佐原真訳)『考古学研究入門』(一九八一年)もモンテリウスの型式学的研究法を簡潔に紹介している。

二 型式学的分析

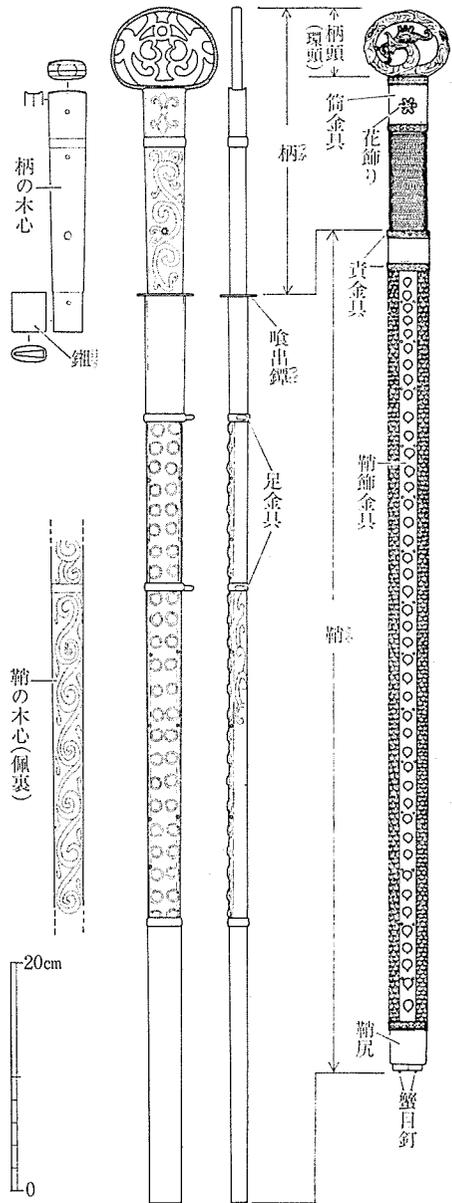
1 装具の概要

単竜・単鳳環頭大刀の資料総数は決して少なくないが、その中で装具全体が残っている例はきわめて限られており、ほとんどの柄頭を残すのみである。しかし、編年にあたっては柄頭以外の部分も重要である。そこで、まずはじめに、限られた資料からではあるが、装具の概要を述べておきたい(第一図)。

柄は、柄頭と柄頭に接する筒金具と、狭い意味での柄である握る部分とに分けられる。柄頭には茎なかばがあり、目釘を用いて柄の木心と結合される。環には竜文が施され、環内にも竜と鳳凰の頭部が表現されている。これらの文様は退化が著しいため、編年にとって重要な要素である。環に接して筒金具がある。柄や鞘の断面は卵形と八角形の二種類があるが、筒金具の断面もそれに応じて卵形や八角形をなす。筒金具の表面には花飾りをもつものや、竜と鳳凰の装飾をもつものがある。また、筒金具の両端に責金具が用いられることもある。責金具の文様には、いくつかの種類が認められる。柄頭のさし込み方を見ると、筒金具や責金具に環が食い込むものと、茎をさし込むだけのものがある。柄の握る部分は、多くは

木心に金銅や銀の線を巻いたものであるが、なかには文様を打ち込んだ金銅板でつつんだものも見られる。

柄と鞘の合わせ方はいくつかの方法がある。鞘口金具の中に柄の線巻がいくらか入り込むものと、はさま 鍔の部分のみが鞘口金具におさまるものがあり、後者のなかには数は少ないが、はみだし 喰出鐔と呼ばれる小さな鐔をもつものがある。鞘口金具は環に接する筒金具と似ている。鞘は鱗状文を施した銀の薄板で裏をつつみ、それを表にまわして、中央で飾金具を用いてとめることが多い。飾金具の文様にも種類があり、ハート形などの透かしをあげるものや、円形の打ち出しを連ねるものがある。鞘尻は先端に蟹目釘と呼ばれる二本の釘を打って、地面に接しても傷がつかないようにしている例が多い。佩用の方法としては、鞘口金具の裏側付近に金具をつけて、垂直に近く佩用する場合と、二個の足金具をつけて、水平に近く佩用する場合がある。この佩用方法の違いは重要である。



第1図 裝飾付大刀の部分名称

刀身は莖に目釘を打って柄の木心と結合される。刀身はすでにさびて失われていたり、鞘から出すことができないなどの理由で、細部のわかる資料が非常に少ない。

以上のように、装具全体を見てみると、変化を知ることのできる要素がきわめて多いことがわかる。はじめに、そのなかで最も連続的な変化を見ることのできる環頭について分析し、続いて装具全体を検討することにした。

2 環頭

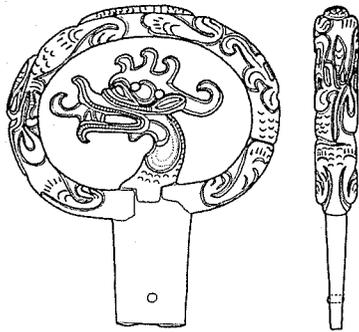
第二図に代表的な環頭を六点示した。このうち(1)から(4)が単竜環頭で、(5)と(6)が単鳳環頭である。竜と鳳は元来全く別であるが、環頭大刀においては類似した形になってきている。通説に従って口先を上下に開いて舌を出すものを竜、口先が開かず玉を噛むものを鳳凰として区別したい。

(1)は大阪府茨木市海北塚古墳出土資料^①である。環は銅を鑄造した上に金箔をかぶせており、それに別鑄で鍍金を施した竜頭をはめこんでいる。このように竜の頭部を別づくりにするものは少ない。この資料には環に二匹の竜が表現されているが、細部はわかりにくい。平面図で見ると、四本の足の他に、左側では頭部下半が下を向き、頭部上半は裏側にまわるのであるが、環は表と裏が同じ文様であり、頭部上半が図では環の右側に見られる。

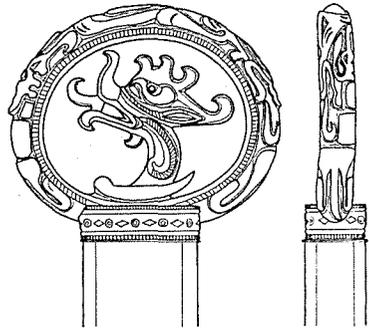
(2)の岡山県赤磐郡山陽町岩田一四号墳出土資料^②は、環と竜頭を一度に鑄造している。前に述べた断面八角形の筒金具をもち、責金具には環が食い込んでいる。

(3)は千葉県市原市山王山古墳出土資料^③である。筒金具には花飾りがついている。この資料を海北塚古墳出土資料と比較してみると、環と環内の竜文がいずれも崩れているという印象を受けるであろう。

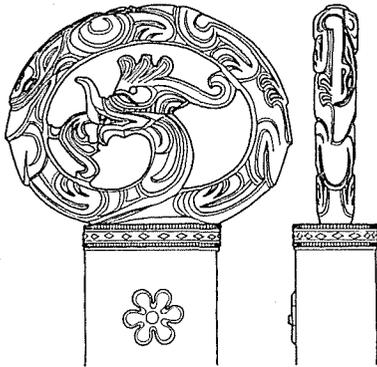
(4)の大阪府高槻市塚原P一号墳出土資料^④は、竜の頭部を見ると、舌がのびておらず、角の形にも特徴がある。あまり例の多くない資料である。



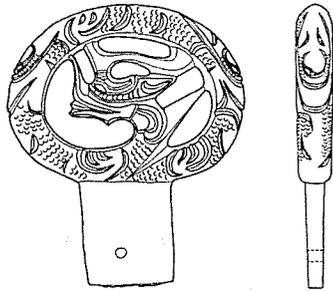
(1)海北塚古墳



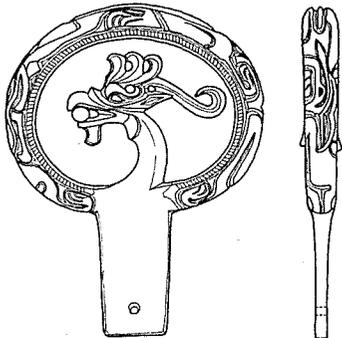
(2)岩田14号墳



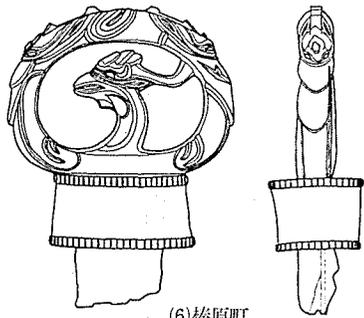
(3)山王山古墳



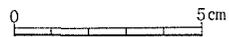
(4)塚原P1号墳



(5)日拝塚古墳



(6)榛原町



第2图 单竜・单鳳環頭実測图

単鳳環頭は(5)の福岡県春日市日拜塚古墳出土資料^⑤が、玉を噛む鳳凰の頭部をよく表現している。それに対し、(6)の伝・奈良県宇陀郡榛原町出土資料（京都大学文学部博物館所蔵^⑥）は、同じ鳳凰ではあるが玉を噛んでいない。頭部を日拜塚古墳出土資料と比較すると、文様の崩れが明瞭であろう。

以上が単竜・単鳳環頭の概要である。次に文様の細部の分析に移る。まず環内の竜と鳳凰の頭部から検討することにした。

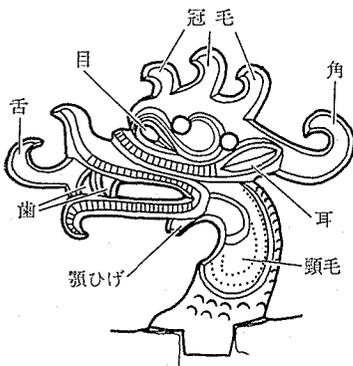
環内の竜と鳳凰 はじめに竜の頭部について細部を見てみよう（第三図）。目は比較的わかりやすいが、目の後方にある

孔を目とまちがえる場合もあるので、注意を要する。目の上には眉のようなものがあり、後方で少し巻き上がっている。目の下からうしろの方に伸びているのが耳である。口には巻き上げぎみの舌と、上下一本ずつの歯がある。なお、鳳凰の場合は舌や歯がなく、玉を噛む。頭頂には三本の冠毛があり、後方には一本の角が伸びている。その他に、下顎からは顎ひげが垂れ、首の部分には頸毛と鱗がある。以上が基本的な竜の頭部である。

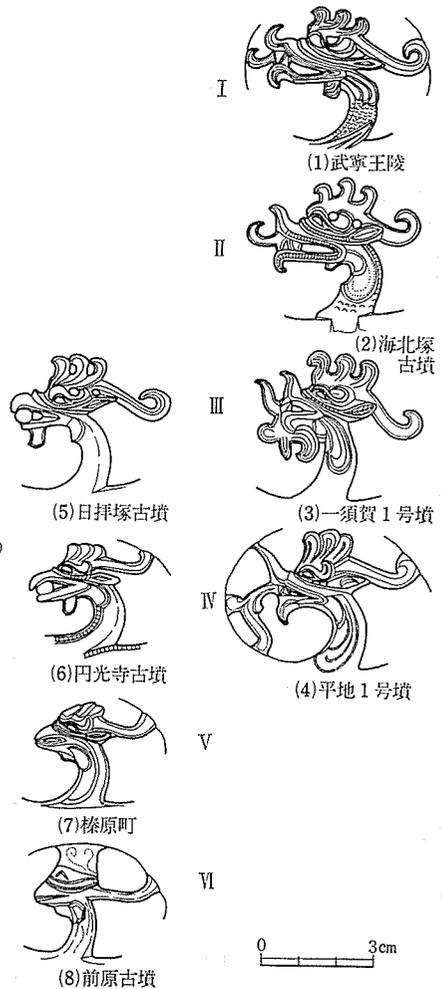
次に、環内の竜と鳳凰の頭部がどのように変化するか、代表的な例をあげて見てみたい。第四図(1)～(4)は単竜環頭大刀の環内の竜の頭部である。

(1)は韓国忠清南道公州武寧王陵出土資料^⑦である。武寧王陵には王と王妃が葬られているが、単竜環頭大刀は王に伴うものである。これまでは環内の竜が右を向く裏側の実測図と写真しか公表されていなかったが、表側を観察した結果首のつけ根の部分に、表裏で多少の違いがあることがわかった。この資料では先にあげた竜の要素が欠けることなく表現されている。

(2)の大阪府海北塚古墳出土資料は、武寧王陵出土資料とくらべて、文様に大



第3図 竜頭部の部分名称



第4図 環内の竜鳳頭部実測図

きな崩れは見られない。目の後方に二カ所小孔をあけることによって、立体感を維持している。しかし、首の側面にある頸毛が写真性を失って扁平になり、列点の表現によって、羽毛の質感がなくなってしまう。

(3)の大阪府南河内郡河南町一須賀^{いちすか}一号墳出土資料になると、目の後方の小孔がなくなり、立体感がやや失われてくる。口の部分には上下の歯と舌が認められるが、舌と下顎の間から異様なものが垂れ下がっていることが新しい特徴である。これが何を表現しているのかはよくわからない。

(4)の長野県飯田市平地一号墳出土資料^⑧では舌が消え、顎ひげもなくなってしまう。この変化は、おそらく一須賀一号墳出土資料において、口に異様なものを付け加えたために、本来の要素が混乱した結果であろう。これまで三本あった冠毛が、互にくっついてしまっている。

なお、以上の四例には製作方法に違いが見られる。(1)と(4)は環と環内の竜頭をいっしょに铸造して鍍金を施したものである。(2)は環と龍頭とを別々に铸造し、金箔をかぶせた環に、鍍金した龍頭をはめこむという方法をとっている。(3)の場合、全体を一度に铸造してはいるが、鍍金は龍頭の部分だけで、環には金箔をかぶせている。角の先や舌などが(1)や(4)の

ように環とくっついているか、それとも(2)や(3)のように離れているかは、このような技法と関連しているのである。なお、金箔をかぶせる方法は、鍍金を重ねるのにくらべ、簡単に厚みのある金色を出すことができるが、はがれやすく弱い。また、新しいものは薄い鍍金ですましていることが多い。

第四図(5)～(8)は単鳳環頭大刀の環内の鳳凰の頭部である。

(5)の福岡県日拝塚古墳出土資料は、目の後方に二孔をもち、口にくわえた玉や顎ひげがはっきりしている。しかし、頭頂の三本の冠毛は互にくっつきはじめている。

(6)の山口県萩市円光寺古墳出土資料^⑩になると、三本の冠毛が完全にくっつき、角の先端もあまり巻き上がり、環とくっついてしまっている。環の内側から首にかけて、刻み目が施されているが、これは環にかぶせた金箔を重ね合わせた部分をとめるために刻み目を入れたものが、鍍金を用いたにもかかわらず文様となって残存しているのである。

(7)の伝・奈良県榛原町出土資料では、口は玉を失って完全に閉じてしまい、三本の冠毛は段によって示されるだけとなる。顎ひげの位置が後退する。

これが(8)の福島県須賀川市前原古墳出土資料^⑪になると、顔の構造がほとんどわからなくなってしまっている。単鳳環頭大刀の最も崩れたものである。

それでは、この鳳凰頭部の変化は竜の頭部の変化とどう対応するのであろうか。(5)の日拝塚古墳出土資料は製作技法のうえで(3)の一須賀一号墳出土資料と同じである。各部分の表現から見ても、一須賀例と共通するところが最も多いであろう。(6)の円光寺古墳出土資料は冠毛のくっつき具合や角の先端の形などから見ても、(4)の平地一号墳出土資料に対応すると考えられる。そこで、環内の竜鳳頭部の変化によって、図に示すようにⅠ～Ⅵの六つの型式をもうけることにしたい。

ここで改めて頭部の各要素ごとに変化を整理しておこう。

目は全体を通じて失われることがない。目の後方にある孔がⅡ式では、単なる丸い小孔が二カ所にあくだけとなる。小

孔はⅢ式では日押塚例に残り、Ⅳ式以降にはない。肩や耳はほとんど変化がないが、Ⅵ式になると肩は消え、耳も痕跡のみとなる。口は、竜の場合Ⅳ式まで歯が残るが、舌はⅣ式になると消える。一方、Ⅲ式で口から異様なものが垂れ下がり、Ⅳ式ではさらにそれが大きくなる。鳳凰の場合、玉を噛むのはⅣ式までである。頭頂の冠毛はⅢ式で三本が互にくっつきはじめ、Ⅵ式では冠毛の形を失っている。角は、はじめ先端が巻き上がっているが、Ⅳ式になると巻きが弱くなり環とくっつく。頸ひげは竜の場合Ⅳ式で姿を消し、鳳凰の場合は、しだいに後退して首と接するようになる。頸毛はⅡ式以後写実性を失う。製作の方法はⅠ式が環と頭部を一度に鑄造し、全体を比較的厚く鍍金している。Ⅱ式では環と頭部が別鑄で、環には金箔をかぶせ、頭部には鍍金を施す。Ⅲ式は環と頭部を一度に鑄造しているが、環には金箔をかぶせ、頭部を鍍金している。Ⅳ式以降は環と頭部を一度に鑄造し、全体に薄く鍍金を施す。なお、以上の変化はあくまでも代表的な資料について論じたものであって、個々の資料に関してはあてはまらない点もないわけではない。

環の竜文 環の竜文は非常にわかりにくいので、はじめに年代がさかのぼり竜の文様の崩れていない資料にふれておきたい。第五図は、中国出土と伝えられ、現在京都大学文学部博物館所蔵となっている帯金具の一部である。類例から三・四世紀の作と推定されている。^⑩ 竜と鳳凰が向かい合っている文様が透彫と毛彫でいねいに表現されている。この竜文を少しくわしく見てみよう。目は人間の目のような形で、はっきり描かれている。口には歯があるが、舌はない。目の後方には、わかりにくい耳がある。目の上から角が後方にのび、先端が巻き上がっている。冠毛は見られない。背中には鱗が列点で表現されており、その他の部分には毛が生えている。四本の足のうち一本の先端が欠損している。足のつけ根付近から羽毛が後方にのびている。指の数は、この例では三本である。以上が三・四世紀の帯金具に見られる竜文の構成要素である。これを念頭において環の竜文を見てみよう。

第六図は環の竜文の展開模式図である。文様が入り組んでいてわかりにくいので、竜の頭部だけを抜き出して第七図に



第5図 帯金具の竜鳳文実測図

示した。ここでとりあげた(1)～(6)の資料は、第四図に示した環内の竜鳳文の分析で用いた資料と同じものであり、それぞれⅠ～Ⅵの各型式に対応している。環にはすべて二匹の竜が表現されており、たとえ環内が鳳凰であろうと、環に施される文様は変わらない。

(1)は韓国武寧王陵出土資料である。図の左側には左向き竜の頭部が、右側には上下逆で右向き竜が表現されている。つまり、環の表と裏は同じ文様になるのである。胴体は分断されており、中央に意味不明の楕円形のものが見られるなど、文様がすでに崩れており、これに先行する資料の存在を推定させる。しかし、鱗の向きを追ってゆくと、二匹の胴体を区別することができる。そうすると、左向き竜の前足は、下半部（表側）の中央と右寄りの二本となる。頭部には目とその上に眉状のものがあり、目の下から後方にのびるのが耳である。口は上下に開き、舌がのびて巻き上がっており、そのつけ根には歯が見られる。頭頂には二本の冠毛があり、角がうしろにのびて巻き上がっている。口のうしろには顎ひげと頸毛が見られる。

これらの特徴を先に示した帯金具の竜文とくらべると、文様には大きな崩れが認められるが、基本的な要素はひとつおりそろっていると考えるてよいであろう。

(2)の大坂府海北塚古墳出土資料は各部分の配置が(1)の武寧王陵出土資料とほとんど同じである。しかし、鱗の方向に一部混乱が見られるなど、胴体の連続性に関する意識はほとんどないといつてよい。それにもかかわらず足の配置や向きが(1)と同じであるのは、(1)のような先行型式をまねたとしか考えられないであろう。頭部を見ると、本来目の下に来るべき耳のつけ根が目と盾の間に来ており、これは他に例を見ない誤りである。口は、舌が同じように巻き上がっているが、歯

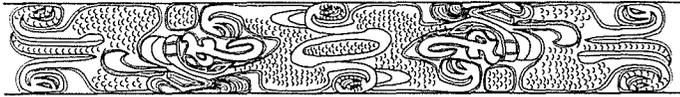
が認められない。また、頭頂には冠毛と角があるが、冠毛は角が二本枝分かれたような形になっている。口のうしろには顎ひげがある。

全体として(1)をよく模してはいるが、基本的な竜の構成に関する認識が欠けているように感じる。

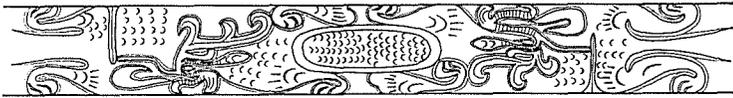
(3)の大阪府一須賀一号墳出土資料では、環にかぶせた金箔を重ね合わせてとめるための刻み目が加えられたために、文様の幅が狭くなり、いっそう窮屈になっている。竜の向きが変わり、頭部が右側で右を向いている。足の配置はこれまでのものと変わらないが、向きが一部異なっている。胴体は完全に崩れ、鱗の向きも一方方向になってしまっているが、中央にある意味不明の楕円形は残っている。頭部を見ると、目と眉はあるが、耳は胴体のように扱われている。口から舌を出すところはこれまでと変わらない。

冠毛は変形しているが二本あり、角が後ろにのびている。顎ひげはすでに形をなしていない。

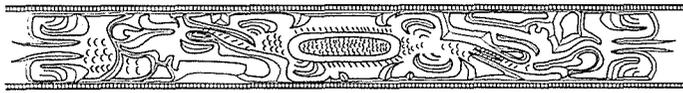
このように、本資料は一見したところ、とても竜を表現しているとは思えない。これを製作した工人も、竜の細部を理



(1)武寧王陵



(2)海北塚古墳



(3)一須賀1号墳



(4)平地1号墳

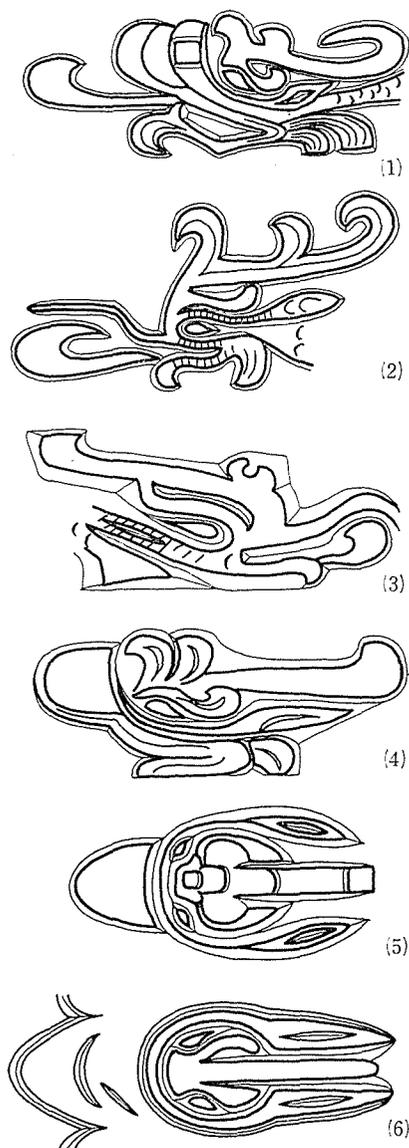


(5)榎原町



(6)前原古墳

第6図 環の竜文展開模式図 (約1/2)



第7図 環の竜文頭部模式図（約1/1）

解していなかったものと思う。

(4)の長野県平地一号墳出土資料は、これまでのものとやや異なった印象を受ける。足の配置はこれまでと変わらないが、向きが変わり、単純化されている。頭部は目や耳がはっきりしており、(3)よりはるかにわかりやすい。しかし、口には舌がなくなってしまうている。二本の冠毛と角もはっきりしているが、角の先端が中央近くに下がってきている。顎ひげははっきりしている。

全体として(3)にくらべ文様がずっとわかりやすいのであるが、これは著しく文様を単純化させた結果であろう。

(5)の伝・奈良県榛原町出土資料では、これまで二匹の竜の頭部の間にあった四本の足が二本に減少し、しかも文様化したものとなる。頭部の最大の変化は、これまで側面から見ていたのが、上から見たところを表現するようになったことである。したがって、目や耳が対となり、口は上顎のみが表現され、冠毛や角も上から見たものになっている。その結果、

頭部は非常に竜らしくなり、全体にすっきりした感じになっている。

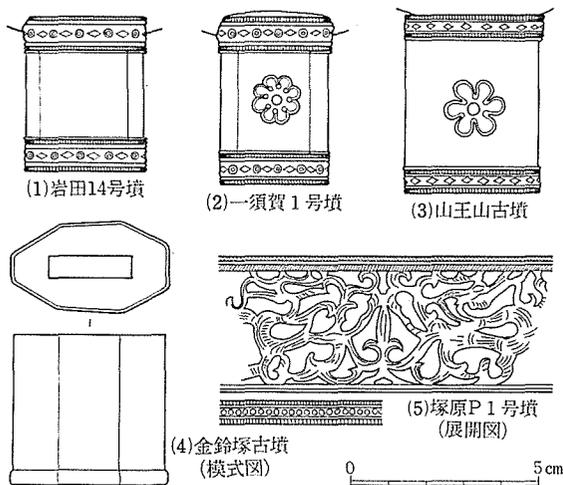
これが(6)の福島県前原古墳出土資料になると、文様の構成は(5)とほとんど変わらないが、冠毛が省略されるなど、一層単純化が進んでいる。

以上に見たように、環の竜文の変化は単なる退化ではない。そこには退化を食い止めようとする努力が認められる。したがって、それなりにすっきりとした美しい文様となっている部分もたしかにある。しかし、足の配置など、工人の努力がおよばなかった部分も残されている。これを見ると、伝統の枠から大きく踏み出すことのできなかった工人の姿が想像されよう。そして、このような部分があるからこそ、我々は型式学的方法を用いて編年をおこなうことが可能となるのである。

さて、これまで検討を加えてきた環の竜文の退化に基づく六つの型式は、前にも述べたように、環内の竜と鳳凰の文様の退化と対応するものである。以上の考察によって、環内の竜と鳳凰の文様の変化と環の竜文の変化とは互いに矛盾しないことが明らかになった。したがって、環内の竜と鳳凰の文様に関して設定したI-VIの型式は、そのまま環の竜文にも適用できることになる。そこで、両者を合わせて、以後は環頭の型式としてI-VIの型式名を用いることにしたい。

3 環頭以外の装具

次に、環頭以外の装具の変化を検討してみたい。ここでは考察にあたって二つの方法が考えられる。第一は、環頭の型式変化とは別に、装具自体から新たに型式を設定し、その後で環頭の変化とつき合わせて検証する方法である。第二は、環頭の型式変化が正しいという前提で、それを用いて装具の変化を検討し、矛盾が生じないかどうかを検証する方法である。多くの資料に恵まれている場合には、第一の方法が有効であろうが、資料の数が限られている場合には、第一の方法



第8図 筒金具・資金具実測図

を用いると手続きが煩雑になり、一見したところ厳密そうに見えながら、実際は形式論理に流れる危険があると思われる。したがって、本稿では第二の方法で、環頭の型式を用いて検討を進めることにしたい。

柄頭近くにある筒金具には、花飾りが施されている場合がある（第八図(2)(3)）。これは柄頭をとめるための目釘を隠す役割を果たすものである。この花飾りが用いられている例は、大阪府一須賀一号墳出土単竜環頭大刀（Ⅲ式）、福岡県日拝塚古墳出土単鳳環頭大刀（Ⅳ式）、千葉県山王山古墳出土単竜環頭大刀（Ⅳ式）、である。限られた資料からではあるが、この花飾りはⅢ式からⅣ式にかけて用いられたものと推定される。

筒金具の両端には資金具が用いられることが多い。資金具は柄以外に鞘にも用いられるが、一本の大刀の中では同じ文様をもつものが使用される。そして、その文様は代表的なものが三種類ある。第一は、珠文と菱形文を交互にくりかえして打ち込むものである（第八図(2)）。岡山県岩田一四号墳出土単竜環頭大刀（Ⅲ式）、大阪府一須賀一号墳出土単竜環頭大刀（Ⅲ式）、福岡県日拝塚古墳出土単鳳環頭大刀（Ⅲ式）などの例があり、いずれもⅢ式である。第二は、菱形文のみをくりかえすものである（第八図(3)）。千葉県山王山古墳出土単竜環頭大刀（Ⅳ式）、静岡県宇洞ヶ谷横穴出土単鳳環頭大刀（Ⅳ式）などの例があり、Ⅳ式に限られている。第三は、珠文のみをくりかえすものである（第八図(5)）。大阪府塚原P一号墳などから出土している。塚原P一号墳の資料は全体にやや特殊なものであるが、環の竜文からⅣ式の段階に相当すると思われる。この種類の資金具は単竜・単鳳環頭大刀には例が

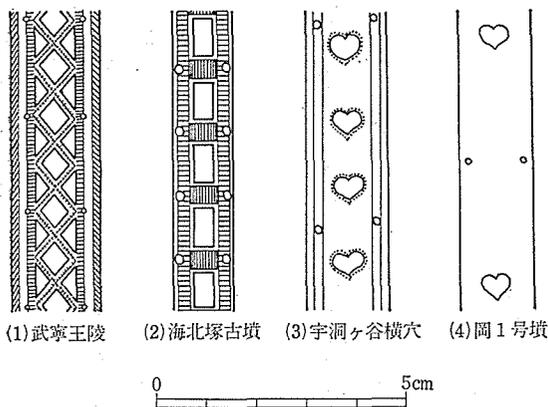
少ないが、他の種類の大刀から考えても、ほぼこの段階とみなしてよいと思われる。以上のように、責金具の文様は時期を限定するのにきわめて都合のよい要素である。^⑧

柄頭の環と筒金具や責金具との接合方法にも変化が見られる。Ⅰ式の武寧王陵出土単竜環頭大刀では筒金具に環が食い込んでいる(第一〇図)。一方、Ⅲ式の資料では責金具を用いるため、責金具に環が食い込んでいる(第八図(1)(2))。ところが、Ⅳ式では、責金具に環が食い込まないものが現れる(第八図(3))。そして、Ⅴ式では筒金具に茎のみをさしこむ例が多い(第八図(4))。この型式の筒金具はⅤ式段階に限られるものであり、これによって獅噛環頭大刀のような他の種類の大刀との平行関係をおさえることができる。なお、筒金具について多少補足すると、第八図(5)に示した大阪府塚原Ⅰ号墳出土単竜環頭大刀(Ⅳ式)の筒金具には竜文が施されており、この段階のものとしては珍しい資料と言えよう。^⑨ また、第一五図に示した福島県前原古墳出土単鳳環頭大刀(Ⅵ式)の筒金具は、金銅板に列点で文様が施されており、双竜環頭大刀や頭椎大刀との平行関係をおさえるうえで重要な資料である。

柄の握る部分は、Ⅴ式までは金銅線や銀線巻であるが、Ⅵ式になると福島県前原古墳出土資料のように、金銅板に唐草文を施したものが現れる(第一五図)。

柄と鞘の合わせ方は、鞘口金具の中に柄の線巻がいくらか入り込む例が、Ⅰ式の武寧王陵出土単竜環頭大刀とⅣ式の千葉県山王山古墳出土単竜環頭大刀に見られる。資料が少ないため正確なことはわからないが、Ⅴ式まではこの方法をとると推定される。それがⅤ式では鐮はばの部分のみ鞘口金具におさまる例が多くなり、Ⅵ式になると福島県前原古墳出土資料のように柄の端に喰出鐮はばが現れる(第一五図)。

鞘は、残っている資料が少ない。千葉県山王山古墳出土単竜環頭大刀(Ⅳ式)と、静岡県宇洞ヶ谷横穴出土単鳳環頭大刀(Ⅳ式)では、鱗状文を施した銀の薄板を用いて鞘の裏をつつみ、表は飾板でその両端をとめている(第一三図(1))。このような鱗状文を施した銀板で鞘をつつむ例は、時代がさかのぼる朝鮮半島の資料にもしばしば見うけられる。^⑩ しかし、



第9図 鞘飾金具実測図

武寧王陵出土単竜環頭大刀には、この部分が残っておらず、また日本での類例も少ないところからみると、何か他の腐りやすい材料を用いていたのではないかと考えられる。なお、Ⅵ式の福島県前原古墳出土資料の場合は、唐草文を打ち込んだ金銅板でつつむものと思われる。

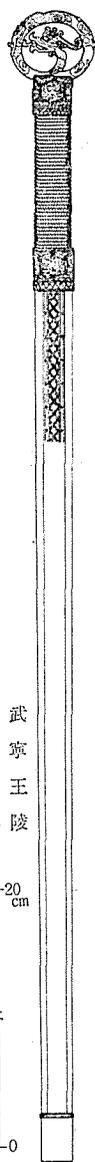
鞘の表の飾板にはいくつかの種類がある（第九図）。(1)は武寧王陵出土単竜環頭大刀（Ⅰ式）の飾板である。(2)は大阪府海北塚古墳出土単竜環頭大刀（Ⅱ式）にともなう。(3)はⅣ式の静岡県宇洞ヶ谷横穴出土資料で、これは千葉県山王山古墳出土資料（Ⅳ式）に類例がある。(4)は京都府竹野郡網野町岡一古墳出土単鳳環頭大刀（Ⅴ式）にともなうものである。類例が、千葉県香取郡小見川町城山一古墳出土単鳳環頭大刀や、栃木県芳賀郡益子町天王塚古墳出土単鳳環頭大刀などにある。いずれもⅤ式である。Ⅵ式の福島県前原古墳出土資料は、金銅板に円形浮文を打ち出し、間を唐草文でうめるもので、双竜環頭大刀や頭椎大刀に多い飾りである。

装具の分析の最後に、単竜・単鳳環頭大刀の佩用法についてふれておこう。佩用方法のわかる資料はほとんど鞘口金具の裏あたりに佩用の装置がもうけられ、垂直に佩用したものかと考えられている。またこの場合、杖のように立てることがあったらしく、鞘尻を守るために蟹目釘と呼ばれる二本の釘が打たれている^③。このような方式はⅤ式にいたるまで一貫して用いられたらしいが、Ⅵ式になると佩用方法に大きな変化が生じる。鞘に二カ所足金具がつけられ、水平に佩用されたことが人物埴輪によっても知られる。足金具の出現からあまり遅れずに蟹目釘が姿を消すのは、大刀を杖のように立てることがなくなり、佩用方法に変化が生じたためであろう。

4 各型式の特徴

これで装具の各要素に関する分析は終わった。そこで、まとめとして各型式ごとに代表的な資料をあげ、どのようなバリエーションがあるかを検討し、さらにその型式を通じて認められる特徴が何であるかを確認しておこう。

I 式 この型式に相当する資料は、韓国武寧王陵出土単竜環頭大刀の一点のみである(第一〇図)。しかし、幸いに



武寧王陵



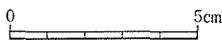
第10図
I 式の資料

も柄頭から鞘尻まで全体がよく残っており、この時期の大刀を研究するうえで基準となる貴重な資料となっている。環内の竜文は、竜の本来の姿をよくとどめているが、環の竜文を細かく見ると、すでに文様の崩れが認められ、これに先行する型式の大刀の存在が推定される。おそらく今後の調査によって、本例に先行する型式の資料が発見されるであろう。なお、本例は筒金具に施された亀甲文の中に鳳凰を表現したり、責金具に細金細工を用いるなど、日本出土の資料には見られない特徴をもっている。

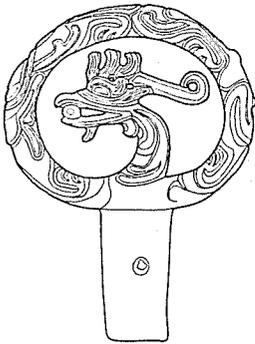
II 式 この型式に相当する資料も、大阪府茨木市海北塚古墳出土単竜環頭大刀しか確認できていない(第一一図)。しかも、環頭、筒金具、鞘飾金具しか残っておらず、最も実体のわからない型式と言わねばならない。しかし、この型式を設定しなければ、I 式とII 式間のギャップが大きくなりすぎるため、あえて型式をもうけたものであり、詳細は今後の資料の充実を待ちたい。なお、I 式にくらべ環や環内の竜文が崩れていることがII 式の特徴である。



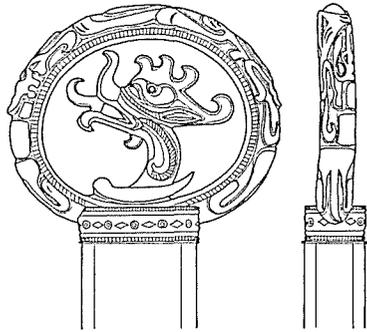
海北塚古墳



第11図 II 式の資料



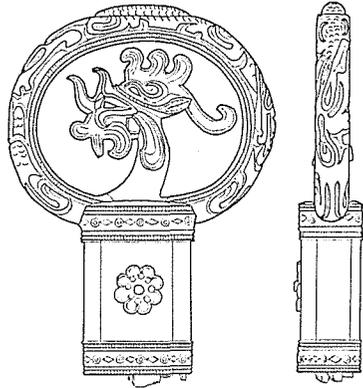
(4)慶応大(K224)



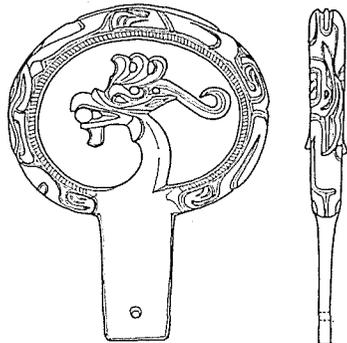
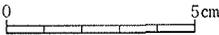
(1)岩田14号墳



(5)慶応大(K128)



(2)一須賀1号墳



(3)日押塚古墳

第12図 III式の資料

Ⅲ 式 この型式に含まれる代表的な資料は次の通りである(第一二図)。

福岡県春日市日拜塚古墳出土単竜環頭大刀

岡山県赤磐郡山陽町岩田一四号墳出土単竜環頭大刀

大阪府南河内郡河南町一須賀一号墳出土単竜環頭大刀

なお、参考のために、慶応大学所蔵の単竜環頭大刀を二点図示しておいた。このなかで装具をもっともよく残しているのが岩田一四号墳出土資料であるが、それでも鞘は残存しておらず、Ⅲ式の鞘は全く不明である。

単竜環頭では、岩田一四号墳出土資料と一須賀一号墳出土資料とが非常によく似ているが、後者の方がやや新しいものと思われる。単竜環頭の三例を見ると、環の竜文はいずれも一須賀一号墳出土資料よりやや崩れているが、崩れ方にバラエティーが認められる。また、環内の鳳凰頭部もそれぞれに個性がある。製作技法に関しても、日拜塚古墳出土資料の場合環を金箔でつつんでいるが、他の二例はすべて鍍金である。したがって、この三例が時期的にほとんど差がないとすると、そこに見られるバラエティーは工人差ではないかと推定される。

次に、Ⅲ式に共通する特徴をまとめておきたい。環の竜文は、竜の頭部が認定できないほどに崩れている。しかし、環内の竜鳳は、まだ文様が比較的しっかりしており、冠毛が互いによりくっついておらず、角の先もまた環とつながっていない。責金具は珠文と菱形文を交互につらねた文様をもつ。環と接する部分の責金具にはニカ所にU字形の切り込みがあり、環が責金具に食い込む形をとる。環は金箔でつつむ例が多く、その場合、環の内側に金箔を合わせてとめる刻み目がある。簡金具の花飾りはこの段階にあらわれ、Ⅳ式にも残る例がある。

Ⅳ 式 代表的な資料は次の通りである(第一三図)。

山口県萩市円光寺古墳出土単竜環頭大刀

大阪府高槻市塚原P一号墳出土単竜環頭大刀

静岡県掛川市宇洞ヶ谷横穴出土単鳳環頭大刀

長野県飯田市平地一号墳出土単竜環頭大刀

千葉県市原市山王山古墳出土単竜環頭大刀

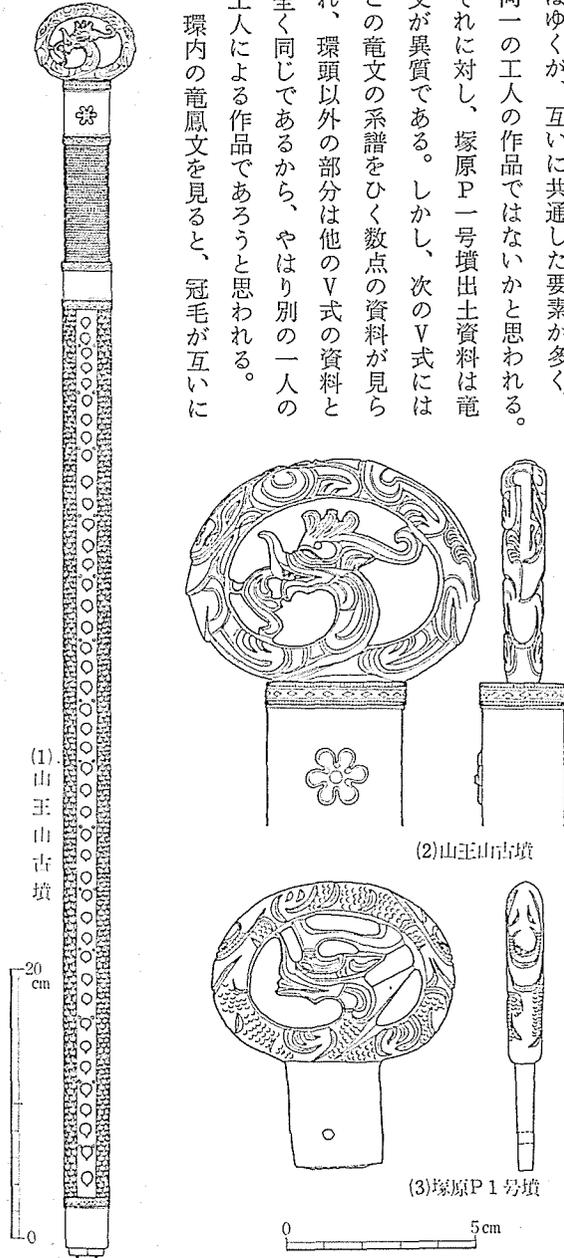
千葉県香取郡小見川町城山一号墳出土単竜環頭大刀（報告書遺物番号二五五）

このなかで、山王山古墳出土資料は全体をほぼ完全に残しており、宇洞ヶ谷横穴出土資料もかなりの部分を残している。環内の竜文を見ると、山王山古墳出土資料、平地一号墳出土資料、城山一号墳出土資料の三点は、しだいに文様が崩れてはゆくが、互いに共通した要素が多く、

同一の工人の作品ではないかと思われる。

それに対し、塚原P一号墳出土資料は竜文が異質である。しかし、次のV式にはこの竜文の系譜をひく数点の資料が見られ、環頭以外の部分は他のV式の資料と全く同じであるから、やはり別の一人の工人による作品であろうと思われる。

環内の竜鳳文を見ると、冠毛が互いに



第13図 N式の資料

くつつき、角の先なども環とつながっている。鳳凰が玉を噛むのはこの型式が最後である。Ⅲ式に見られるような環に金箔をかぶせるものではなく、すべて鍍金である。しかし、金箔を重ね合わせてとめるための刻み目が単なる装飾となって残る例はある。菱形をつらねた文様をもつ貴金具はこの型式に限られるが、他に珠文をつらねるものもある。環が貴金具に食い込むことはなくなる。鞘は鱗状文を施した銀薄板でつつみ、表をハート形の透かしを密にあけた飾金具でとめている。

V 式 代表的な資料は次の通りである(第一四図)。

岡山県赤磐郡山陽町岩田一四号墳出土土単竜環頭大刀^②

奈良県吉野郡下市町岡家古墳出土土単鳳環頭大刀^②

伝・奈良県宇陀郡榛原町出土土単鳳環頭大刀(京都大学文学部博物館所蔵)

京都府竹野郡網野町岡一号墳出土土単鳳環頭大刀

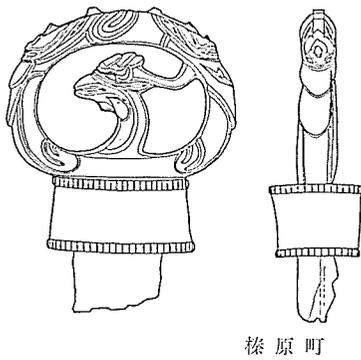
千葉県木更津市金鈴塚古墳出土土資料^②(二点 単竜一、単鳳一)

千葉県香取郡小見川町城山一号墳出土土資料(四点 単竜一、単鳳三)

栃木県芳賀郡益子町天王塚古墳出土土単鳳環頭大刀

これらのなかで、岡一号墳出土資料が比較的良く残している。その他にも柄の構造がわかる資料は多い。単竜環頭はこの中に三点あるが、環内の竜文を見ると、そのうち二点がV式の塚原P一号墳出土資料の系統であり、もう一点の金鈴塚古墳出土資料は他に例の少ない特殊なものであつて、武寧王陵出土資料の伝統をひく竜文は見られなくなる。また、単竜環頭が減つて単鳳環頭が多くなる。

環内の鳳凰は、口に噛んでいた玉を失うなど、文様の退化が著しい。柄



塚原町

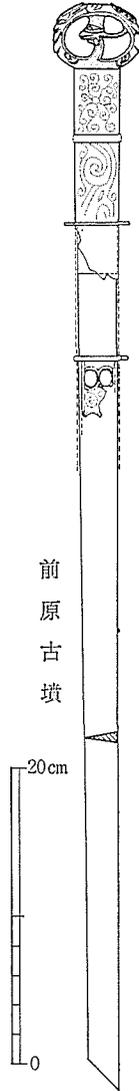
0 5 cm

第14図 V式の資料

の簡金具は断面八角形で黄金具を伴わない特徴的な型式のものがほとんどである。鞘の飾金具は心葉形の透かしを間隔を
とってあけるものが多い。

V式は単鳳環頭大刀の量産段階にあたるということができる。

VI式 福島県須賀川市前原古墳出土単鳳環頭大刀がこの型式に属す（第一五図）。環頭のみ例は他にも多い。前原



第15図
M式の資料

古墳出土資料は柄と刀身と鞘の一部が残っている。V式と比較すると環内の鳳凰は退化が著しい。喰出鐔と足金具をもつ
ことがこの資料の大きな特徴である。鞘は珠文を打ち出してその周囲に列点を施した飾金具を伴っている。これらは双竜
環頭大刀や頭椎大刀に多く見られるものである。

- ① 梅原未治「摂津福井の海北塚古墳」(『近畿地方古墳墓の調査』二、日本古文化研究所報告 第四、一九三七年)。東京国立博物館所蔵。
- ② 神原英朗編『岩田古墳群』(『岡山県宮山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』第六集、一九七六年)。中国古代資料館所蔵。
- ③ 上総山王山古墳発掘調査団編『上総山王山古墳発掘調査報告書』(一九八〇年)。千葉県立上総博物館所蔵。
- ④ 高槻市史編さん委員会編『高槻市史』第六巻 考(古編)(一九七三年)。高槻市教育委員会所蔵。
- ⑤ 中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎「日拝塚」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第五輯、一九三〇年)。東京国立博物館所蔵。
- ⑥ 京都大学文学部編『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第二部、日本歴史時代(一九六八年)。
- ⑦ 大韓民国文化財管理局編『武寧王陵』(一九七四年)。国立公州博物館所蔵。
- ⑧ 大阪府教育委員会編『河南町東山弥生集落跡発掘調査概報』(一九七〇年)。大阪府教育委員会所蔵。
- ⑨ 信濃史料刊行会編『信濃考古綜覧』下巻(一九五六年)。吉川庄三郎所蔵。
- ⑩ 弘津史文「長門国阿武郡大井村字内光寺の古墳」(『考古学雑誌』第一二〇巻第一号、一九三〇年)。萩市郷土博物館所蔵。写真より作図。
- ⑪ 江藤吉雄「福島県須賀川市前原古墳群発見の飾大刀二題——環頭・

方頭——」(『福島考古』一八号、一九七七年)。安藤喜金所蔵。

⑬ 梅原末治「金銅透彫竜紋帯金具に就いて」(『考古学雑誌』第五〇巻第四号、一九六五年)。

⑭ ただし、武寧王陵では王妃(五二六年没)の副葬品である小刀のなかに菱形文をつらねた資金具をもつものと、珠文をつらねた資金具をもつものが見られるが、日本の出土資料との関連は不明である。

⑮ 筒金具に二匹の竜が胴体をからませる文様をもつものが朝鮮半島出土資料に多く見られる。本資料は筒金具の竜文としては最も崩れたものであるが、これに直接先行する資料は不明である。

⑯ 穴沢味光・馬目順一「日本・朝鮮における鱗状紋裝飾の大刀」(『物質文化』第三三号、一九七九年)。

⑰ 樋口隆康「網野岡の三古墳」(『京都府文化財調査報告』第二三冊、一九六一年)。

三 単竜・単鳳環頭大刀の年代

これまでに検討を加えてきた資料のなかで、絶対年代との関連を知ることができるものは、武寧王陵出土資料である。武寧王陵から王の副葬品として単竜環頭大刀が出土していることは先にふれたが、さらに王妃にもなつて竜文の裝飾をもつ紀年銘銀製腕輪が出土しており、この二点の資料によって、ほぼ確実な年代の基準を得ることができるのである。^⑱

武寧王の即位は五〇一年であり、五二三年に没していることが文献や墓誌から知られている。したがって、王の副葬品である単竜環頭大刀の製作年代が五二三年を降らないことは確実である。

一方、王妃にともなう銀製腕輪には、王の副葬品である単竜環頭大刀の環とよく似た竜文が施されており、その内側には「庚子年」の作と記された銘文が見られる(第一六図)。庚子年は五二〇年にあたるから、この銀製腕輪の製作は五二〇

⑱ 丸子亘編『城山第一号前方後円墳』(一九七八年)。

⑲ 栃木県史編さん委員会編『栃木県史』資料編考古一(一九七六年)。小林行雄「鏡・大刀・玉のなぞ」(帝塚山大学考古学談話会第二〇〇回記念「古墳の謎を探る」一九八一年)。

⑳ 穴沢味光・馬目順一「蟹目釘付輪尻裝具をもつ飾大刀とその系統について」(『福島考古』二二号、一九八〇年)。

㉑ 報告書において環頭1とされている資料であり、Ⅲ式のものとは異なる。

㉒ 河上邦彦編『平群・三里古墳』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告)第三三冊、一九七七年)。

㉓ 滝口宏編『上総金鈴塚古墳』(一九五二年)。西村強三『上総国木更津市金鈴塚古墳出土品修理報告書』(一九六五年)。

年であり、これを最も正確な年代の基準とすることができる。竜文が類似するところから見ても、単竜環頭大刀の製作も同じころと考えてよいであろう。したがって、先に設定したⅠ式の年代は五二〇年頃とすることができる。

次に、須恵器の編年との対応関係を見てみよう。まず、先に設定した単竜・単鳳環頭大刀の各型式ごとに伴出須恵器の型式を列挙したい。なお、須恵器の編年は田辺昭三に従う。

〔Ⅰ式〕須恵器は伴出していない。

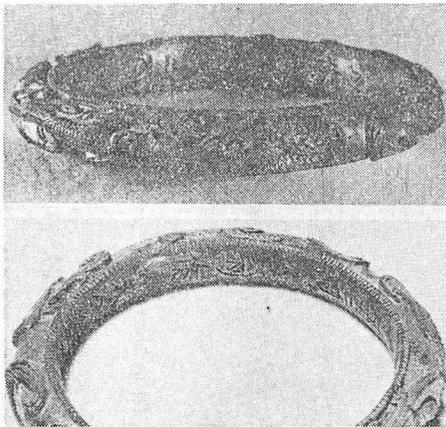
〔Ⅱ式〕大阪府海北塚古墳では横穴式石室から杯・高杯・聴・台付長頸壺・器台などが出土している。TK四三～TK二〇九型式に相当すると思われる。

〔Ⅲ式〕岡山県岩田一四号墳では横穴式石室から七棺が検出され、一〇体以上が葬られたと推定されている。杯・高杯・聴・提瓶・台付長頸壺などが大量に出土しており、TK四三～TK二〇九型式が中心で、それより新しいものも少し混じるようである。

大阪府一須賀一号墳の横穴式石室からは、杯・有蓋高杯・短頸壺・台付長頸壺が出土している。実測図が一部しか公表されていないが、TK四三型式を含むことは確実である。

〔Ⅳ式〕大阪府塚原P一号墳では横穴式石室から杯・高杯などが出土している。TK四三～TK二一七型式に相当すると思われる。

静岡県宇洞ヶ谷横穴は追葬がないと推定される。杯や高杯などが出土しているが、高杯が畿内のもものと共通しており、TK四三型式のきわめて純粋な資料である。したがって、Ⅳ式はTK四三型式より新しくならないであろう。



第16図 武寧王陵出土銀製腕輪（径8cm）

千葉県城山一号墳では横穴式石室からTK四三～TK二〇九型式の杯などが出土している。^⑧

〔V式〕奈良県岡峯古墳は横穴式石室であり追葬が考えられるが、杯・高杯・台付長頸壺などはすべてTK二〇九型式で、時期の幅が狭い。^⑨したがって、V式はTK二〇九型式より新しくならないであろう。

京都府岡一号墳では横穴式石室から杯・高杯・有蓋高杯などが出土している。TK二〇九型式と、それよりやや新しいものを含んでいる。^⑩

岡山県岩田一四号墳の須恵器はⅢ式の項で、千葉県城山一号墳はⅣ式の項ですでにふれた。

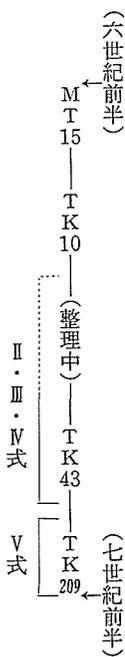
〔Ⅵ式〕須恵器の伴出例はない。

以上の須恵器伴出例を見ると、大部分が横穴式石室で、追葬がおこなわれており、共存関係が明確な資料は少ない。しかし、限られた資料からではあるが、次の二点は認めることができよう。

- (1) TK四三型式より古いTK一〇型式の須恵器を共存する例はない。
- (2) V式の資料はTK四三型式の須恵器を共存しない。

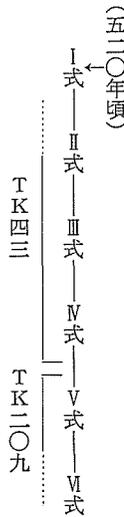
したがって、伴出須恵器から見ると、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式がTK四三型式に平行し、V式がTK二〇九型式に平行すると推定される。

それでは、これらの須恵器の絶対年代はどのように考えられているであろうか。田辺昭三による年代の比定と単竜・單鳳環頭大刀との対応を示すと次のようになる。^⑪



これに従うと、TK四三型式は六世紀後葉から末にあたり、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式の年代が六世紀後葉から末ということになる。

先に武寧王陵出土資料からⅠ式の定代を五二〇年頃と推定したが、整理中型式を考慮に入れても、これではⅠ式とⅡ式の年代が少し開くことになる。そのような矛盾が生じる原因としては、ひとつにはⅡ式やⅢ式の資料の製作年代と副葬年代との間に開きがあるという問題が考えられる。その他に、須恵器の絶対年代比定にも多少の流動性が考えられないわけではない。伝世などを全く考えないとすれば、TK四三型式の開始を五二〇年からあまり降らない時期とせざるをえない。その場合、単竜・単鳳環頭大刀と須恵器の対応関係は次のようになる。



以上の点を考慮に入れ、本稿では単竜・単鳳環頭大刀が盛行した時期を六世紀中葉から末と考えておきたい。

- ① 大韓民国文化財管理局編『武寧王陵』（前掲）。
- ② 田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ（一九六六年）。なお、本稿で問題となる時期の編年は次の通りである。
- TK一〇型式↓整理中型式↓TK四三型式↓TK二〇九型式↓整理中型式↓TK二一七型式。
- ③ 梅原末治『摂津福井の海北塚古墳』（前掲）。東京国立博物館所蔵資料による。
- ④ 神原英朗編『岩田古墳群』（前掲）。
- ⑤ 大阪府教育委員会編『河南町東山弥生集落跡発掘調査概報』（前掲）。
- ⑥ 高槻市史編さん委員会編『高槻市史』第六巻 考古編（前掲）。
- ⑦ 静岡県教育委員会編『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』（静岡県文化財調査報告書）第一〇集、一九七一年。なお、報告書では須恵器を二型式に分け、追葬を考えている。
- ⑧ 丸子亘編『城山第一号前方後円墳』（前掲）。
- ⑨ 河上邦彦編『平群・三里古墳』（前掲）。
- ⑩ 樋口隆康『網野岡の三古墳』（前掲）。
- ⑪ 田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ（前掲）。同『須恵器大成』（一九八一年）ではTK一〇型式を新古に分け、整理中型式を除外している。陶器山八五号窯出土資料がTK一〇（新）に相当するらしい。『須恵器大成』ではこの時期の須恵器の絶対年代を推定しうるものとして、磐井の墓とされる福岡県岩戸山古墳出土資料、埼玉稲荷山古墳出土資料、飛鳥寺下層資料があげられている。飛鳥寺下層資料はTK四三型式に相当するため、TK四三型式は飛鳥寺の建立がはじまった五八八年の直前か、その少し前の年代とされている。

四 結 語

以上、単竜・単鳳環頭大刀の型式学的分析にもとづいてⅠ～Ⅵの六つの型式を設定し、その年代を考察した。その結果明らかにした点は以下の通りである。

第一に、絶対年代の知られている武寧王陵とのつながりが、遺物のうえで明らかにした。これまでも武寧王陵出土単竜環頭大刀との類似を指摘された資料はあったが、文様の厳密な比較によって、より信頼のおけるものとなった。これによって、後期古墳の編年における年代的基準がひとつ加えられたものと思う。

第二に、型式学的研究法の適用で、単竜・単鳳環頭大刀に関して細かい相対年代が明らかになった。これによって、裝飾付大刀の分析から首長層の政治的動向をうかがうという目的のための、基礎的な資料とすることが可能になったものと思う。また、裝飾付大刀には須恵器のような地域色が見られないため、地域ごとの古墳編年の対応を明らかにするうえでも何らかの役割を果たすであろう。

第三に、本稿の分析を通じて、型式学的研究法を適用しうるひとつの例を加えることができたものと思われる。今日、型式学的研究法の安易な適用とそれに対する反動としての型式学不信の傾向が見られるが、正当な手続きを経るならば、型式学的研究法は決して危険なものではないであろう。ただし、型式学的研究法を有効に活用しうるような条件をそなえた資料に限られていることもまた明らかである。

本稿における考察によって、単竜・単鳳環頭大刀は六世紀中葉から末にかけて盛行することが推定された。今後、さらに装具の共通性などによって、同様な方法を用いて双竜・双鳳環頭大刀や頭椎大刀などの編年の対応を明らかにすることが可能である。見通しとしては、双竜環頭大刀や頭椎大刀はやや遅れて六世紀後葉から七世紀前葉にかけて盛行すると推定され、その他の種類の大刀も考慮に入れると、六世紀中葉から七世紀前葉が裝飾付大刀の盛行期といえる。

この時期は兵制の面では直木孝次郎のいう「B型舎人軍」の形成の時期にあたる。①「B型舎人軍」は東国国造の子弟よりなる天皇親衛軍で、天皇の専制的権力の強化に重要な役割を果たしたと考えられている。②ところで関東地方では国造級と思われる古墳から裝飾付大刀が数多く出土している。また、双竜・双鳳環頭大刀や頭椎大刀を含めた裝飾付大刀の分布は時期が降るにつれて東国に重点が移る。さらに、やや時代は降るが続日本紀には「授刀舎人」という用語が見られる。これらの点から裝飾付大刀と舎人との間には何らかの関係が存在するのではないかと推定される。裝飾付大刀を佩用したのが舎人に限られるとは考えられないにしても、裝飾付大刀の編年と分布の研究は、天皇親衛軍の形成過程と、各地域におけるその実態を明らかにするうえで無視することのできない資料となるであろう。今後はそのような視点で検討を進めてゆきたいと考えている。

① 直木孝次郎『日本古代兵制史の研究』（一九六八年）。

② 「天皇は六世紀前半の継体朝前後の動乱をさかいとして、豪族連合的天皇から専制君主的天皇に転換しつつあった。この天皇の専制的地位を擁護し推進するのが、B型舎人よりなる天皇親衛軍である。これが舎人軍拡大の歴史の意味である。」（前掲書二一六頁）。

〔付記〕 本稿は京都大学文学部に提出した一九七六年度卒業論文の一部を書き改めたもので、その主旨はすでに京都大学考古学談話会（一九八一年一月三日）の場で発表をおこなっている。

本稿で用いた資料の調査においては、ソウル大学校金元龍教授、国立公州博物館洪斌基館長のほか、国内では東京国立

博物館、京都国立博物館、慶応義塾大学考古学研究室、千葉県立上総博物館、高槻市埋蔵文化財センター、萩市郷土博物館、中国古代資料館などの各機関および、安藤喜金、近藤隆彦、鈴木公雄、築比地正治、永山倉造、野上丈助、八賀晋、本村豪章、吉川庄三郎の各氏に大変お世話になった。裝飾付大刀の研究にあたっては平素から穴沢咏光、馬目順一両氏の御援助を受けている。本稿の作成にあたっては、樋口隆康、小野山節の両先生から御指導をいただいた。さらに、岡内三真、宇野隆夫両氏をはじめ考古学研究室の諸氏から多大の御協力を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。

（京都大学大学院生）

The Chronology of the Decorated Swords
in the Late Tumulus Period

by

Izumi Niiro

The decorated swords which were worn by members of powerful family of the Late Tumulus Period as a symbol of authority were significant remains. In this article I discuss a kind of such swords, the Tanryū- 単竜 or Tanpō- 単鳳 ring-pommeled swords, and try to clarify the date of them through typological analysis of patterns of the Ryū 竜 or the Hōō 鳳凰 in the ring and the Ryūmon 竜文 on the ring.

The Tanryū- or Tanpō-ring-pommeled swords excavated in Japan have relation to the Tanryū-ring-pommeled swords excavated from the mausoleum of the Paekche's Munyong Wang 百濟武寧王 and we can trace the process in which their original patterns were getting out of shape. So taking into consideration the date of the mausoleum of the Paekche's Munyong Wang and the chronology of the Sué pottery associated with the Japanese ring-pommeled swords, we can infer that from the middle to the end of the 6th century the Tanryū- or Tanpō-ring-pommeled swords were most widely spread.

Further, considering this inference in relation to the chronology of other decorated swords (for example, the Sōryū- 双竜 ring-pommeled swords or the Kabutsuchi- 頭椎 swords), the investigation of this article will be useful for considering the conditions of the local powerful families and of the military system in the Late Tumulus Period.